わが国におけるオープンウォータースイミング(OWS)の成長発展に関する研究

トップスポーツマネジメントコース
5008A318-4　鷲見全弘　　研究指導教員：　平田竹男教授

筆者は、現在、日本水泳連盟オープンウォータースイミング(以下、OWSと表記)委員長を拝命し、わが国における同競技種目の成長発展に関わる活動に幅広く取り組んでいる。

OWSとは、海・川・湖などの自然環境を舞台に泳ぐ、トライアスロンの水泳の部分が独立したような水泳競技のことである。プールで泳ぐ競泳種目と異なり、選手同士の身体接触や駆け引きが多くみられ、潮の流れや波の影響を考慮したレース戦略を練ることから「泳ぐマラソン」とも言われている。国際水泳連盟(以下、FINA と表記)が統括している5つの水泳競技種目のひとつで、1991年から世界水泳選手権の正式種目になり、2008年からオリンピックの正式種目となった、最も新しい水泳競技種目である。

本研究は、筆者自身がOWSを成長発展させるべく、科学的に裏付けを持つ適切な方策を模索したいと考えて取り組んだものである。

はじめに、OWSの概要とわが国におけるOWSを取り巻く環境に触れ(第1章)、次に、本研究に用いる「トライアスロンとの比較」と「競泳の事例検証」の2つの研究手法について記述した(第2章)。

そのうえで、まず、トライアスロンとの比較を行うことで、選手の強化育成プロセスに欠かせない年代別チャンピオンシップの欠落という、OWSの抱える問題点を抽出した(第3章)。

次に、競泳の事例検証を行い、その強化・振興策の成功要因の抽出を試みた(第4章)。

その結果、個別のスイミングクラブにおいて確立しつつあったジュニア選手からトップ選手への強化育成プロセスを、競い合う場としての年代別チャンピオンシップが機能させていることを突き止めた。これにより、全国JOC ジュニアオリンピックカップ水泳競技大会を底辺とした6重のピラミッド構造「競泳の6重構造」が完成し、ジュニアからトップに至る強化育成プロセスが確立したことが、近年の競泳の成功要因であることを明らかにした。

このことから、OWSにおいても欠落している年代別チャンピオンシップを実施して、「OWS の6重構造」を構築することが、OWSの有効な振興策であることを明らかにすることができた。その構築順序については、トライアスロンや競泳において、大学選手権がトップ選手だけでなく、競技役員・指導者・審判など普及に欠かせない人材の輩出基盤としても機能していたことに着目し、大学選手権から実施することが最も効果的であることを導き出した(第5章)。

しかし、「OWSの6重構造」の構築は長期的な取り組みが求められるため、これとは別に、ロンドンオリンピックへのOWS 日本代表選手の派遣実現に向けた短期的に効果が望める即効性のある施策の構築を模索した。

まず、北京オリンピックの出場選手の分析から、OWSの上位選手に求められるレベル・層を設定して、スウィートゾーン(要件を満たす選手のゾーン)を明らかにした。次に、スウィートゾーンに属する為には一定レベル以上の競泳選手である必要が判明したことから、競泳選手のOWSへの移行を促進させるための具体的な方策として、クロストレーニングの有効性を説くことで競泳コーチの理解を得ることと、競艇場を使用したOWSの開催が有効であることを突き止めた。さらに、北京オリンピックのOWS出場者の経歴分析から、上位選手が継続的にFINA 主催のOWSへ参加していることを突き止めた。これにより、競泳選手のOWS移行後の強化育成方法として、OWS大会への継続的な参加を通じて強化育成を推進する、「武者修行型の強化育成」が必要であることを導き出した。

このようにして、1)どのような競泳選手を、2)どのような方策でOWSへ移行させ、3)どのような方法で強化育成を図るか、という一連の流れを、「競泳選手のOWS移行促進アクションプラン」として明確にすることができた(第6章)。

以上のことから、長期的な振興策である「OWSの6重構造の構築」と、即効性のある短期的な施策である「競泳選手のOWS移行促進アクションプランの推進」を組み合わせることにより、OWSの成長発展は達成するものと結論づけた(第7章)。

本研究は、学術面、実務面、社会面において意義があると考える。

学術面においては、その新規性が挙げられる。現在、OWSについては、医科学分野に属する論文は見られるものの、競技の振興に関する先行研究は見られない。よって、他競技種目との比較および事例検証から、競技の強化育成に欠かせない6重構造の構築にはどのような特長・効果があるのかを明らかにした点、および、競技の振興に欠かせない有望選手の選定・獲得・育成の手順を明示した点に、その意義があると考える。

先行研究のない新興競技が、マイナーからメジャーに成長発展するために必要な方策を具体的に示した点において、本研究は、他の新興競技やマイナー競技の、効果的な振興策の立案にも影響を与えるものと考える。

実務面では、筆者自らが当該競技種目の責任者であり、本研究が直接その強化・普及体制の充実に資する点が挙げられる。PLAN、DO、CHECK を実践していく当事者として、本研究は、具体的なアクションプランの構築に有効な示唆となる。

社会面では、その社会的なメッセージ性が挙げられる。本研究に基づいた振興策を通じて将来OWS が成長発展すれば、OWSは、主にプール水泳に基づいて構築されてきた『水泳ニッポン』の水泳文化に加えて、「水泳と自然環境の融合」、「水泳を通じた自然との共生」という、海洋国家にふさわしい新しい水泳文化をわが国に根付かせる端緒となると考える。更に、広く国民の心身の健康増進に寄与するだけでなく、国民的な自然環境保護の意識啓発にも寄与するものと考える。

以上のことから、OWSの振興策を明らかにすることは、学術面、実務面、社会面において、大変有意義なものであると考える。